

危機対応での個人的能力

谷口武俊

危機はいつ襲いかかってくるか分からない。危機の様態も多様だ。自然起因か技術・事故起因か人為的・意図的なものか、瞬時的か間欠的か長期継続的か様々だ。時に我々の生命のみならず、社会の基本的な構造や根本的な価値観・規範を脅かす。

これまで、私は緊急事態（軍事を除く）対処についてリスク・ガバナンスの観点から政府・行政や組織の問題や課題を考えてきたが、危機対応における個人レベルの問題・課題とは何だろうか。本稿では、このことを考えていた時に知った「ネガティブ・ケイパビリティ」と「心理学的レジリエンス」という個人的能力について紹介したい。

考え得る最悪の事態を想定し、被害の最小化と迅速な復旧のために可能な限りの準備をし、事が起きたら冷静かつ臨機応変に対処する。これが政府・行政そして組織に求められる危機対応だ。では、個々人の場合はどうだろう。防災教育では“命を守るため何が必要か、自ら考えてみよう”と様々な取り組みがなされており、最悪の事態に備えようと行動する人もいる。しかし、日常の生活のなかで、生死を伴う深刻な危機そして最悪の事態を真剣に考えることは容易ではない。極度の不安や恐怖感を招き、心理的負担が大きいことは想像に難くない。最悪の事態など考えたくもない、ケセラセラだという人もいる。このような状況でどのように危機に対処するか。そのヒントがネガティブ・ケイパビリティという概念にあると社会学者の有田伸は言う。

これは、英国の詩人J.キーツが文豪シェークスピアの持つ“理由付けや結論付けを急がず、真に創造的な創作をなす力”として発見したもので、その後、精神分析の分野で注目された能力である。有田は、危機対応の文脈で、“最初から絶望してしまうのでもなく事態から目を逸らしてしまうのでもなく、具体的な状況を想像しつつ、そのなかで少しでも可能な対処を考え実践していく力”、“対処が難しい状況に身を置きつつ可能な範囲で耐える能力”がネガティブ・ケイパビリティだという。しかし、言うまでもなくネガティブ・ケイパビリティには、過去の体験や社会的経済的な環境なども作用し個人差がある。この個人的能力を高める努力を行ないつつ、能力の低い人が不利益を被らない方策を考えることは社会的な課題だろう。

次に、心理学的レジリエンスという個人的能力である。レジリエンスは一般に“外乱やシステム内部の変動に対して状態を平常に保つ能力、あるいは機能を大きく損なわない、損なったとしても早期に機能回復できる能力”を指すが、心理学においては“逆境から素早く立ち直り、成長する能力”、精神医学では“極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持することができる能力”をいう。過酷な体験によりPTSDを発症するか否かは、個人のレジリエンス能力によるという。心理学者の小塩真司は、レジリエンスは新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向、自尊感情などの心理的要素から構

成されるとするが、実際には多くの要素が関わり複雑な相互関係をもつという。心理的レジリエンスを構成するのは、生得的な要素や自ら獲得・強化し得る要素だけでない。自己効力感（やればできるという自信）という要素は、自らの経験だけでなく、“あなたなら出来る”といった言語的説得や“うまくやっている人を見る”といった代理的経験、つまり他者の介入や他者とのつながりにより獲得・強化し得るものだ。

阪神淡路・東日本大震災を始めとする大規模自然災害、二年にわたる新型コロナ禍などの危機対応の現場やその後のリアルを凝視すると、危機対応は人による人のための活動であり、人が中心だということ、そして人を大切に対する感性が必要であり、人間の弱点を百も承知でなければ、危機への対応はできないと改めて思い知る。

複雑化する社会に蔓延する諦観や厭世観や政治への不信感が、平時からの共助に対する消極姿勢や忌避意識そして人々の思考停止を助長している。このような状況にあって、危機対応において基底的に作用するであろう個人的能力、ネガティブ・ケイパビリティと心理的レジリエンスをどのように高めていくか。これは大きな社会的課題だが、その大前提は個人的能力の差の存在を認めること、自助・自己責任論的なことを強調しないことだと思う。そして、平時からのリスクコミュニケーション（対話・共考・協働）の継続的实践を通して、無作為や思考停止の帰結を想像し、リスクの受忍レベルを探り、覚悟（備え）の大切さを腑に落とし、個人的能力の獲得を促すとともに、平時からの共助意識を醸成することが重要ではないだろうか。

（東京大学名誉教授＝技術リスク政策）